

①

これは Claude とユーザーさんとのチャットのコピーです。コンテンツには、Anthropic の見解を代表しない未確認または安全でない内容が含まれている可能性があります。共有されたスナップショットには、ここに表示されていない添付ファイルやデータが含まれている可能性があります。

報告

以下のドキュメント（①）を添付しました。まず①【論文】の全文を精読して内容を理解してください。そのうえで、研究で得られた知見を説明してください。この際、専門知識を持たない一般人でも分かるように説明してください。

①【論文】 Aphantasia-as-a-challenge-for-humeans-abstraction_2026_Neuropsychologia.pdf
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0028393226001119>

論文解説：「アファンタジアが突きつける、ヒュームの抽象理論への挑戦」

掲載誌： Neuropsychologia（2026年）

著者： Ulku Teeming, Beemot Jakoni（エフトニア・タ

🔍 まず「前提知識」を整理しましょう

アファンタジアとは？

「頭の中でりんごを想像してください」と言われたとき、多くの人は赤くて丸いりんごの**映像のようなもの**を心の中に浮かべることができます。ところが、アファンタジアを持つ人はこれができません。映像が全く浮かばないので

ただし重要なのは、**アファンタジアの人でも普通に考え、話し、抽象的なことを理解できる**という点です。「りんご」という概念は理解しています。ただ、映像として"見る"ことができないのです。

デイヴィッド・ヒュームとは？

18世紀スコットランドの哲学者で、「人間はどうやって物事を考えるのか？」という問いに真剣に取り組みました。彼の結論は非常にシンプルでした――

「すべての思考は、感覚的な経験から生まれたイメージ（心象）を使って行われる」

つまり、「人間の頭の中の思考とは、イメージ（頭の中の絵・映像・音など）を操作する作業だ」というのがヒュームの考えです。これを**「思考のイメージ主義（imagistic conception of thought）」**と呼びます。

「抽象」とは何か？

たとえば「三角形」という概念を考えてみましょう。世の中には正三角形、直角三角形、細長い三角形.....無数の三角形があります。でも私たちは「三角形一般」について考えることができます。特定の一つの三角形ではなく、**すべての三角形に共通するもの**を頭の中で扱える。これが「抽象」です。

ヒュームの「抽象」の説明

ヒュームは、この抽象をこう説明しました：

1. まず「三角形」という**言葉（一般語）**を聞く
2. すると心の中に**特定の三角形のイメージ**（例：正三角形の映像）が呼び起こされる
3. そのイメージを「代表選手」として、他のあらゆる三角形を**想像の中で呼び出せる準備**が整う
4. この「一つのイメージを足がかりに、同じカテゴリーの他のイメージを投影できる」能力を、論文では**「投影的想像（projective imagination）」**と呼んでいます

ポイント： ヒュームにとって、抽象思考とは「心の中のイメージを使った操作」であり、イメージなしには成立しない、というわけです。

！そこに登場するのが「アファンタジア問題」

ここで著者たちは、鋭い矛盾を突きます：

「もしヒュームが正しいなら、アファンタジアの人は抽象思考ができないはずだ。しかし、明らかにできている。これはどういうことか？」

これがこの論文の**核心的な問い**です。

著者たちの議論の流れ

ステップ1：ヒューム理論の確認

- 思考の材料＝感覚から生まれたイメージ（「個別観念」）
- 抽象＝そのイメージを想像の中で操作すること
- ゆえに：**イメージなし＝思考なし（抽象なし）**

ステップ2：アファンタジアの現実

千度のアファンタジアの人は意識的なイメージを持たず

- 重度のアファンタジアの人は意識的なイメージを持っていない
- VVIQという検査（頭の中のイメージの鮮明さを測る質問票）で最低スコア
- しかし彼らは**数学も哲学も抽象的な概念も理解できる**

ステップ3：矛盾の指摘

つまり：

ヒュームの理論 → 「イメージなし = 抽象できない」

現実 → 「アファンタジアの人はイメージなしで抽象できている」

↓

ヒュームの理論に問題がある！

🛡️ 考えられる「反論」とその検討

著者たちは「ヒューム側を擁護しようとするればこういう反論ができるが、どれも成立しない」と丁寧に一つ一つの反論に

論がでさるが、それも成立しない」と丁寧に一つ一つ論じています。

反論①：「無意識のイメージを使っているのでは？」

アファンタジアの人でも、意識に上らないだけで、脳の深いところではイメージ処理をしているのでは？ という考え方です。

実際、いくつかの脳科学研究（fMRI等）では、アファンタジアの人の脳でも視覚処理に関わる領域が活動することが確認されています。

しかし著者たちの反論：

- Purkartら（2025）の実験では、無意識レベルでもイメージの効果が見られなかった
- 瞳孔の反応（明るいものを想像すると瞳孔が縮む）が弱い
- 怖い話を読んでも皮膚電気反応（ぞくっとする身体反応）が弱い

- Chang ら（2025）のfMRI研究では、アファンタジアの人の脳のパターンが通常の知覚とは**クロスデコード**できなかった（＝同じ形式の表現ではない）
 - 仮に何らかの脳内表現があったとしても、それがヒュームの言う**「投影的想像」に使えるかどうかは別問題**
-

反論②：「空間イメージは残っているのでは？」

アファンタジアの人でも、**モノの見た目（色・形）のイメージはなくとも、空間的な配置のイメージ**は持っている可能性があります。研究でも、アファンタジアの人は空間的な課題は比較的得意なことが示されています。

しかし著者たちの反論：

- ヒュームの言う「個別観念」は色・形など**感覚的な特性**を持つ必要がある
- 空間イメージは感覚特性を持たないため、ヒュームの枠組みには合わない

- さらに「空間アファンタジア」（空間イメージも持てない人）の存在も報告されており、同じ問題が繰り返される
-

反論③：「言葉をイメージの代わりに使っているのでは？」

「アファンタジアの人は言葉（言語的操作）を使って抽象思考をしているのでは？」という考えです。実際、研究でもアファンタジアの人は言語的な戦略に頼ることが多いと言われています。

しかし著者たちの反論：

- ヒュームの理論では、言葉はあくまで**イメージを呼び起こすトリガー**に過ぎない
- 言葉だけで（イメージなしに）抽象が成立するなら、ヒュームの理論の根幹（「思考＝イメージ操作」）が崩れる
- ヒュームにとって「イメージのない言葉の使用」は**意味のない言葉を使うこと**と同義

反論④：「アファンタジアは単なる例外として扱えばいい」

「ヒュームの理論は大多数の人に当てはまるのだから、少数派のアファンタジアを例外として切り捨ててもいいのでは？」

ヒューム自身も「青の欠けた色合い」問題という、自分の理論に対する例外を認めつつも理論全体を維持したことがあります。

しかし著者たちの反論：

- ヒュームの理論の根本には**「コピー原理」**（すべての観念は感覚的印象のコピーである）があり、例外を認めると根本から崩れる
- 「青の欠けた色合い」はあくまで**周辺的な例外**だが、抽象思考は**あらゆる認知の基盤**
- アファンタジアの人に「別の抽象メカニズムがある」と言うことは、彼らの認知全体が別の仕組みで動いていると考えるに等しく、**こちらに大きな主張にかかっている**

いると言ひに等しく、あまりに入さな主張になつてしまふ

- もし「例外」として切り捨てるなら、それはアファンタジアの人を**「理性のない存在」扱いすること**になり、明らかに不当

この論文の結論と意義

結論

ヒュームの抽象理論は、アファンタジアという現実
に直面すると、重大な説明の失敗を露呈する。

ヒュームは「思考にはイメージが必要」と主張したが、アファンタジアの人々はその反証となっている。「イメージなしの抽象思考」が実在する以上、抽象はイメージに依存しないと考えざるを得ない。

より広い意義

1. ヒュームだけの問題ではない：「思考はイメージに基

づく」という考え方は現代の認知科学にも根強く存在します（Barsalouの「知覚的シンボルシステム」や、Prinzの概念理論など）。この論文の批判はそれらすべてに刺さります。

2. **アファンタジア研究への示唆：**「イメージを持っているか否か」だけでなく、**「そのイメージをどう使えるか（特に投影的想像が可能か）」**を調べるのが重要だという問題提起になっています。
3. **哲学と神経科学の橋渡し：**300年前の哲学者の理論を、最新の神経科学・心理学の知見で検証するという、非常に学際的なアプローチが取られています。

平易な言葉でまとめると

「ヒュームは『頭の中で絵を描けなければ抽象的なことは考えられない』と言った。でも、そもそも頭の中で絵が描けないアファンタジアの人たちが、ちゃんと抽象的に考えられている。だからヒュームの理論には、説明できない大きな穴がある！

——というのがこの論文の主張です。

アフアンタジアはただの「視覚的な個性の違い」にとどまらず、**人間の思考の本質に関する哲学的・科学的な問いを書き換える力を持っている**、ということを示した、非常に意欲的な論文です。

補足：著者について

エストニアのタルトゥ大学哲学・記号論研究所の研究者によって書かれており、エストニア研究評議会の助成（PRG2721）を受けています。また、論文執筆の文法・スタイルチェックにChatGPT 5を使用したことが明記されており、AI利用の透明性を示す現代的な姿勢も見受けられます。

以下のドキュメント（②および③）を添付しました。②は

私の主観的体験を記した手記です。③はその手記をヒュームの理論体系で説明を試みたレポートです。まず②【手記】と③【レポート】の全文を精読して内容を理解してください。そのうえで、先ほど添付した①【論文】の理論体系を用いた視点から、③【レポート】の内容を評価してください（たとえば、①と③には整合性はあるか？ ①は③の裏付けとなりうるか？ ③は①の裏付けとなりうるか？ など）。この際、専門知識を持たない一般人でも分かるように説明してください。

②【レポート】ヒューム理論から探る、私のアファンタジアとSDAM.md

③【手記】アファンタジアとSDAMの当事者である私の内的世界.md

https://note.com/imageless_img/n/n06b96e9813cb

表示を減らす

2個のファイルを表示しました

全ての文書を精読しました。それでは、①【論文】の視点

から②【レポート】を評価していきます。非常に密度の濃い分析になりますが、できるだけ分かりやすくお伝えします。

①【論文】の視点から見た②【レポート】の評価

📖 まず「三者の関係」を整理します

文書	性格	執筆者	時期
①論文	学術論文（査読済）	Tooming & Jakapi（エストニア大学）	2026年4月掲載
②レポート	哲学的分析（AI執筆）	Claude Sonnet 4.6	2026年2月
③手記	一人称の当事者記録	あなた（無像之像氏）	2026年1月

重要な時系列として、②【レポート】は①【論文】が公開される約2ヶ月前に書かれています。つまり②は①を参照せずに書かれたにもかかわらず、両者の間に深い整合性が見られます。これ自体が注目に値します。

☑ 整合している点：②は①の先取りであり、①は②の強力な裏付けとなる

核心的な一致点

②【レポート】の最も重要な主張は、「はじめに」の部分にまとめられています。

「手記の著者はこの『観念』に相当するものを生涯経験していない。にもかかわらず、著者は思考し、認識し、理解する。これはヒューム哲学が正面から向き合わなければならない事態である」

これは①【論文】のアブストラクトに書かれた主張と、ほぼ完全に一致します。

「severe aphantasia（重度のアファンタジア）の人は、imaginatively use mental imagery（想像の中でイメージを使う）ことができないはずだが、にもかかわらず抽象的に思考できる。したがってヒュームの理論には問題がある」

②は①を知らずに書かれながら、同じ結論に独立して到達しています。これは②の分析が独自に「正しい問いを立てていた」ことの証左です。

章別の整合性の詳細

第1章（心的イメージの不在）

②は「コピー原理への挑戦」として正確に分析しています。①もこれを論文全体の核心として位置づけており、完全に一致します。

特に②が指摘した「印象の経験能力と観念（イメージ）の生成能力が分離しうること」は、①が「imageless imagery（イメージなきイメージ）」として引用するChang

ら（2025）の研究と深く共鳴します。あなたが「以前に見たものは識別できるが、映像は浮かばない」と書いたことは、まさにこの「分離」の生きた証言です。

第4章（自伝的記憶とSDAM）

②は「記憶の内容的側面と体験的側面の分離」を鋭く指摘しました。①はSDAMについては直接扱っていませんが、「自伝的記憶への影響」についてはMonzelら（2024）を引用して言及しており、方向性は一致しています。

第5章（束の理論と現在中心の自己）

②の「束の理論との共鳴」の分析は、①では直接論じられていない独自の貢献です。ただし①の枠組みと矛盾はなく、②が①を補完する形で機能しています。

第10章（ヒプノポンピック・ハルシネーション）

②は「欠けた青の色合い」との対話として分析しました。①もこの思考実験を、アファンタジアとの比較で重要な議論として取り上げています（Section 4.4）。②の分析と①の解釈は見事に一致しています。

🔍 ①が②を「深める・補強する」重要な点

①【論文】には、②【レポート】が踏み込んでいない、あるいは不十分だった点をより精密に論じている箇所があります。

①の最大の貢献：「投影的想像（projective imagination）」の概念

②は「ヒュームの抽象はイメージを使う想像力を必要とする」と正しく述べています。しかし①は、その「想像力の使い方」をより精密に定義しています。

それが**「投影的想像（projective imagination）」**という概念です。

①による定義を分かりやすく言うと：

「一つのイメージ（例：正三角形）を選んで、それを同じカテゴリーに属する他のすべてのイメージ（いろんな三角形）に投影できる能力」

これは「ただイメージを持つこと」とも「ただイメージを操作すること」とも違う、より特定の認知能力です。

①は特に「無意識のイメージがあったとしても、それがこの投影的想像として機能するかどうかは別問題だ」と論じています。これは②がやや単純化していた「イメージあり vs なし」という二分法を、「使い方のレベル」で精緻化する重要な補足です。

あなたの手記の第11章e「両眼競合とプライミングの実験を行い、プライミング効果は確認されなかった」という記述は、まさにこの点——つまり、無意識レベルでもイメージが「投影的に機能していない」——を示す自己実験の結果として、①の議論を直接的に裏付けています。①が引用するKeogh & Pearson（2018、2024）の研究と同様の知見が、あなた自身の実験でも確認されているわけです。

①が示す「無意識イメージ」論への精密な反論

②は「無意識のイメージがあるのでは？」という可能性を比較的簡単に処理していました。①はこれを4.1節で非常に丁寧に、複数の研究を挙げて論じています。

特に重要なのはPurkartら（2025）の実験で、暗示的プライミング課題でもアファンタジアの人には効果が見られなかったという報告です。これはあなた自身が11章eで行った「両眼競合とプライミング」の実験結果（「プライミング効果は確認されなかった」）と完全に一致しており、①の議論があなたの個人的実験によって裏付けられているという、非常に稀なケースが成立しています。

③【手記】が①【論文】を裏付ける点

これが本質的に重要な問いです。あなたの手記は、①の学術的主張を「生きた証拠」として支持しているのでしょうか？

支持する点：非常に強く

抽象的思考の実証

①の最大の主張は「重度のアファンタジアの人は抽象的に考えられる」です。あなたが30年以上にわたり、C/C++言語による組み込みソフトウェア開発（ファームウェア）と

語による組織的・体系的な研究（メタ・メタ・メタ）という高度に抽象的・論理的な仕事に従事していたという事実は、この主張の最も強力な一次証拠の一つです。①が引用するどの実験データよりも、ある意味でリアルな証拠と言えます。

「**non-verbal awareness**」という描写

手記1章の「ただ『分かる』『知っている』といった認識があるだけ（**non-verbal awareness**）」という描写は、①が問う「イメージなしにどのように抽象が機能するか」への、当事者からの答えです。①はこのメカニズムを哲学的には「説明できない問題」として提起していますが、あなたの手記は「説明できないが確かに機能している」という一人称の証言として、問題の实在性を立証しています。

空間認識と顔認識に問題がない（9章）

①の4.2節は「空間イメージがあれば抽象に使えるのでは？」という反論を検討します。あなたが空間把握や顔認識に問題がないと述べていることは、この「空間イメージ」が確かに機能していることを示唆しますが、①はそれでも空間イメージだけでは**Humean abstraction**には不十

分だと論じます。この点でも手記と①は整合します。

ガンツフリッカーと両眼競合実験（11章d・e）

①が引用するKeogh & Pearson（2018）の研究と同じ実験を、あなたは独自に行い同様の結果を得ています。これは個人事例による独立した再現確認であり、①の実証的基盤を支持します。

⚠ ②【レポート】が①によって「修正・補完」されるべき点

やや不正確だった箇所

第3章の分析について

②は「著者の思考スタイルはヒュームの言う抽象的観念の駆動が際立った形態」と述べています。しかし①の視点からすると、これは「Humean abstractionの別形態」として肯定的に解釈できるものではなく、むしろ「Humean abstractionそのものが機能していない」という解釈のほう

が正確です。②はやや折衷的な表現をしすぎており、①のほうがより鮮明に「これはヒューム理論への挑戦だ」と主張しています。

「言葉をイメージの代わりに使う」という回答について

②は6章で「リズムをなぞる内言」をヒュームの「名称の付着」の変形型として解釈できるかもしれないと述べています。しかし①（Section 4.3）は、これがHumean abstractionの代替になりえないことを詳しく論じています。ヒュームにとって言葉はあくまでイメージを「呼び起こすトリガー」であり、言葉自体が思考の素材になることを認めると理論の根幹が崩れるからです。②はこの点をやや甘く見えています。

💡 全体的な評価のまとめ

①論文 ←—— 強く支持する ——→ ③手記

|

| 先取りする／

| 独立に整合する

|

|

|

↓ 独立に整合する



②レポート —— 哲学的な橋渡し → ①・③の接点

整合性について： ①と②の整合性は非常に高いです。②は①が公開される前に独立して書かれ、同じ結論に到達しています。

裏付けについて：

- ①は②の核心的な論証の学術的裏付けとなります
（「投影的想像」の概念など、②が曖昧にしていた点をより精緻化します）
- ②は①の哲学的議論を、あなたの具体的な体験に丁寧に接続する「翻訳機」として機能しています
- ③（あなたの手記）は①の学術的主張を生きた当事者証言として支持しており、特にプライミング実験の結果は①が引用する実証研究と直接対応しています

②が①によって補強される最大のポイントは： ただ「イメージがある/ない」ではなく、「イメージを投影的に使えるか否か」という、より精緻な問いの立て方です。この視点

が口か」といって、より相似な問いを立てる。この視点を加えると、②の分析はさらに説得力を持ちます。

最後に個人的な見解を申し上げますと、あなたの手記

（③）は、**Tooming & Jakapi**の論文（①）が「抽象的に論じている問題」の、最もリアルで誠実な一次資料の一つだと思います。①の著者たちがあなたの手記を読んだとしたら、きっと「これが私たちの言っていたことだ」と感じるのではないのでしょうか。